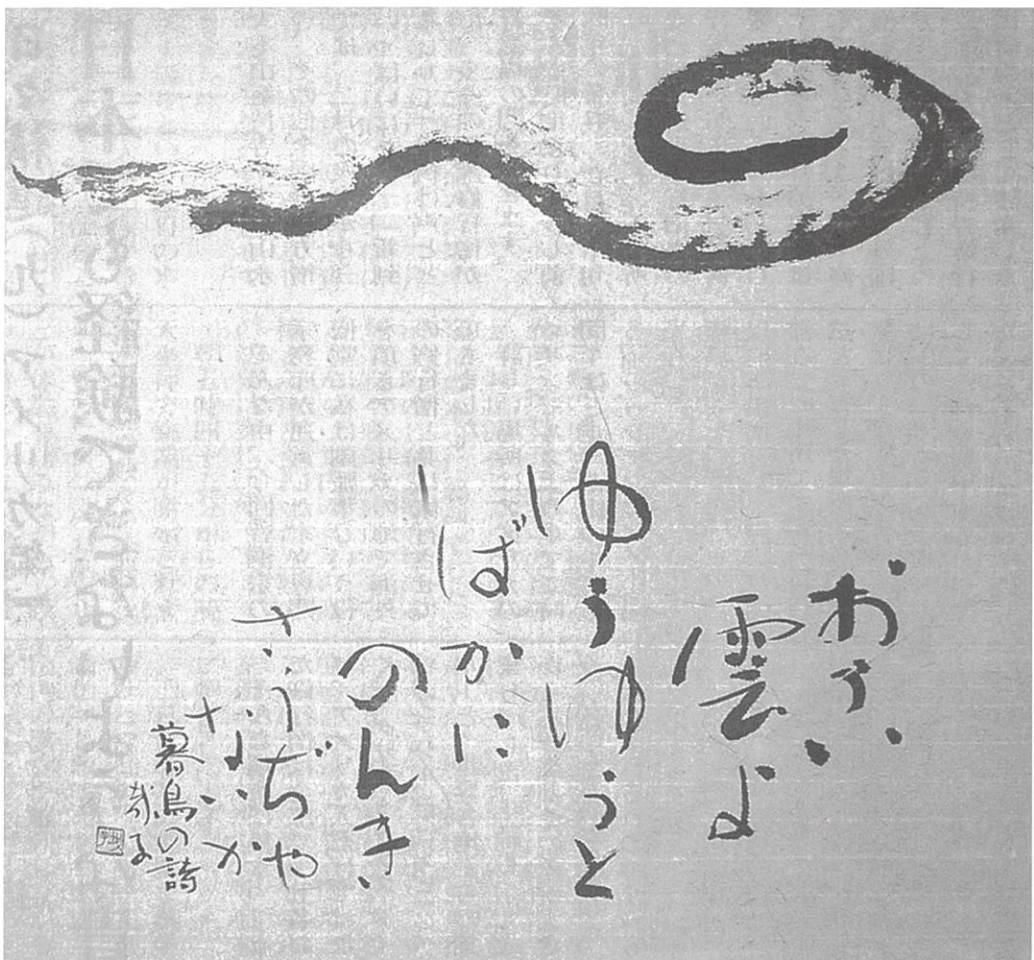


蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆
近藤龍弘

〒940-0052
長岡市神田町1丁目4番10
TEL.0258-32-2811

◆スタッフ◆
小林国二・小林善秋・高橋深
室賀清輝・高橋利春・加瀬由起子
近藤マリ子・近藤真弘・近藤善信
後援・株式会社アサヒ
印刷・(株)北越時報社



ご家族の皆さままでご覧ください

少しの『ムダ・のんびり』を大切に

翠巖 龍弘

上の写真の書『おうい雲 ゆうゆうと ばかに のんき さうじゃ ないか』は客殿に掛けられているものです。子供の頃よく大地に大の字に仰向けになり、流れゆく雲をのんびりと眺めていたことを懐かしく思い出します。この書を見ていると何故か気持がゆつたりとできます。

現代社会では多くの人が何がかに追われているようで、自身を顧みる機会も少ないのではないのでしょうか。大人だけではなく子供も塾通いの勉強三昧や、お稽古事などで忙しく、遊ぶ時間のない子供も大勢いるようです。

先日、経済番組のテレビを見ましたが、隣国韓国でも小学校三年生以上で公園で遊んでいる子供は少なく、塾通いとのこと。なかにはこれからは英語など、語学が大事と、母親が一緒に海外留学させている家庭もあり、

父親が寂しい一人暮らしを強いられ、お酒に溺れたり、中には寂しさのあまり自らの命を断つ人もでて社会問題にもなったそうです。競争社会に生きざるをえないため、子供のうちから精一杯頑張らせることが将来のためになるとの親心からでしょうか。

また、「時は金なり」とばかり、時をはじめ色々なものに「ムダ」を少しでもなくす頑張りの日々、しかし豊かになる代償として多くの国で経済格差や色々な問題もおきているようです。それらからおこる苛立ち、光と陰があるようです。

日捲りカレンダーに『猫は手をかざさないが 気持を休めてくれる』『あわてるな 昔はみんな歩いてた』という言葉がありました。猫にかぎらず生き物を飼育、草花を育てる家庭も多くなりりましたが、これらの

ことは少しはお金も手間もかかりません。だが、これらをしなくても人間は生きていきます。

また、日本家屋の床の間、この空間があれば本棚や整理棚を作ることが出来ます。しかし「ムダ」と思われることが人間にとって大切なことが多々あるのではないのでしょうか。交通手段も便利で高速化し、行動範囲も広がりました。

しかし偶にゆつくり歩いてみると、草花などちよつとした四季の変化や、回りの環境に新しい発見や気付きがあります。また、遊びを通して得るものも多くあります。

こんな時代であるが故に、時間的にも空間的にも少しの「ムダ」を求め、ゆつたりと大空の雲を眺めて『のんびり』出来るならば、心身共に生きくとした自分、社会、国に近づくのではないのでしょうか。

【日々精進(九) アメリカ編】

日本でも経験できないような貴重な経験

近藤真弘

大本山総持寺や大本山永平寺、その他全国の地方僧堂では、二月の後半から三月いっぱいにかけて「新到よろしゅう」の掛け声とともに、多くの新米修行僧が修行道場の門を叩きます。

そんな時期よりも少し前の昨年の暮れ、一二月の中旬より、ちよつと変わった場所で変わった新米修行僧との修行生活が始まりました。何が変わっているのかと申しますと、まず、修行の場所は日本ではなくアメリカで、修行僧も日本人ではなく外国の方々だったという事です。以前にも私が総持寺修行中に研鑽僧として渡米した際の報告を季刊誌に書かせて頂きました。その時にも触れましたが、曹洞宗の禅の教えは日本国内だけではなく、アメリカや、ヨーロッパ、南米など世界各地に広がっております。

そんな中、今回曹洞宗の宗務庁が運営した宗立専門僧堂に私は副監事という役を頂きアメリカの地で海外の修行僧と共に修行させて頂きました。

詳しい場所はアメリカのロサンゼルスより車で二時間半ほど走った山の中にある「禅マウンテンセンター(陽光寺)」という禅センターで、標高が一七〇〇mほどあり、以前研鑽僧として一カ月間滞在した場所です。ここは自然と共存した場所であり、電気はソーラー電気を使い、水は山の湧水をタンクに貯蔵してそれを利用するといった、今はやりのエコを実践した場所でありました。

標高が高いだけに寒さも厳しく、山を下りれば砂漠地帯の暖かな地域ですが、修行の場所は朝晩気温がマイナスになり、何度か雪も降りました。

そんな場所に集まってきた修行僧は全部で一五名おり、アメリカ人だけではなく、イタリア、フランス、ドイツ、ブラジル、コロンビア、ペルーと、世界各地からの集まりでした。年齢も二九歳から六四歳とその差が大きく、女性も五名おりました。みんなそれぞれの師匠の

と、得度を済ませた僧侶であり、日本の修行道場と同じ本格的な禅の修行を求めやってきました人たちです。

本来それぞれがそれぞれの国にある禅センターなどで日常から坐禅を中心にして僧侶の生活を送っている方々ですが、国により、地域や指導者により、日本の修行道場



と同じような修行生活を行っているところは少なく、今回の宗立専門僧堂では日本での修行生活となるべく同じような生活を送る事を目的として、坐禅以外にも、作務や講義も頻繁に行い一日の流れは、日本の様々な僧堂のやり方や、古来からの「清規」と呼ばれる資料を参考に、その場所にあった行持を作り上げ、その指導に当たると共に、自らも一緒に修行してまいりました。

私は最初、禅という基幹があるにせよ、文化が違う言語が違う集まりの中まともな修行生活なんかできるのだろうかかと不安もありました。しかし、現地スタッフや宗務庁の綿密な事前準備により、無事に始まり、大変内容のある修行生活を修行僧と共に過ごす事ができました。

修行生活に必要な仏具でも、無いものがあればその場で作って代用したり。例えば梵鐘なんかは買うことも、代用品としてプロパンガスのボンベを半分に切り、それを吊るして梵鐘として利用し

たりしました。最初は音も軽く、滑稽なようでもありました。慣れると静寂の山の中に鳴り響くその音は心地よく、まさに日本の立派な梵鐘と同じように感じられました。

各国からの修行僧も皆真剣にその生活に取り組み、少しでも多くの事を吸収しようと積極的に質問をし、黙々と行持をこなしていき

私自身も僧堂を立ち上げから関るといふ事は日本でもなかなか経験できることではなく、又、海外の一生懸命に禅を学ぼうとしている人達と共に生活できたことは大変貴重な経験でありました。多くの人達との出会いも、自身の今後の僧侶としての生活の中では宝であり、参加できたことをほんとうにうれしく思います。

今回のアメリカ生活はいろいろな人の支えによって実現し、多くの事を勉強させていただきました。その感謝に報いるためにもここでの経験を糧に、日々精進していきたいと思います。

授戒会の修業、感動、そして感謝

太刀川善之助

風薫り緑萌え命の躍動する初夏、五月三十日～六月三日の五日間、安善寺様にお願いして新潟県曹洞宗青年会三十周年記念事業としての「授戒会」に参加させて頂きました。

三十周年という節目の事業だけあって大本山永平寺の福山諦法貫主を戒師様として教授師様・引請師様・説戒師様をはじめ百人を越える数の僧侶の方々(直壇)が戒弟(授戒会参加者)のお導き、お世話をしてくださる姿には本当に感謝でした。田上町の名利東龍寺様の本堂は我々戒弟が約百五十名ですから、堂内の多くの直壇さん達と合わせた人数での法要は実に圧巻です。



朝五時四十五分からの暁天坐禅で修業が開始されますが、読経や数々の法要、説戒(戒法についてのお話)などが休憩を挟みながら、夜の九時三十分まで修業は続きます。小食(朝食・中食・菜石(夕食)も作法に則り禅寺特有?の食器でいただきますが、精進料理であり日本人としてはメタボリックにはならず栄養バランスも完璧な食事でした。聞くところによると、本山での修業僧の食事は「ずつと粗食(朝)らしいです。」

三日目は特に重要な法要のひとつとして、「南無三世諸仏」とお唱えをしながら山内の諸堂を整理しながら巡り、夜は翌日に「お血脈」を受けるとしての前提としてなのでしょうか、授戒会用の白衣(おびる)を着て、静寂中の懺悔(ざんげ)道場で過去に犯した罪を「小罪無量」と告白して、その罪を福山諦法貫主様に許しを請い改める儀式がありました。一人ひとりが貫主様から一言お声かけして頂く、実に感動的(という表現は不適切なほど...)で涙する戒弟すらおりました。



四日目は坐禅・読経・説戒・法要などのほか、夜は教授師様から十六条の戒めを読んで頂く儀式に次いで、いよいよ一人ひとりが福山諦法貫主様より戒めの証としての「お血脈」を授かる儀式が厳かに執り行われました。授戒会最大の感動・感激の時間でした。



在家でありながら戒名をいただき、戒師様をはじめ教授師様・引請師様ほか曹洞宗の高僧の方々から、戒弟の私たちが佛としての儀式を受けるわけですから恐ろしい儀式です。最後の五日目は法要や説教・三師様へのお拝、戒師様のお見送りなどをすませ、昼過ぎに授戒会は終わりました。「戒」は深い信仰に根ざした生活を送る決意を促す教えであるといわれますが、凡夫の私が日常の生活でどこまで実践できるかどうか心もとないです。しかし、道を外しながらも時々戒めに戻した生活を送りたいものだと思います。とても良い機会を与えていただき経験できたことに感謝します。修業の最中に安善寺様の近藤住職様ご夫妻が来られて励まして頂きましたし、副住職様からは直壇としてずっと私たちをお世話くださったので安心して過ごせました。これも感謝です。ありがとうございました。

徹関先生に学ぶ — 中村先生を偲んで — (三)

西澤 正元

(前号からの続き)

「教育と禪」の本は、見附小学校の職員図書に入れたり、二、三の知人に贈った記憶がある。もう二十年近い昔に書かれた本であるが、七十歳を超えた中西先生が小、中、高校(退職後、高校の講師をされた)の豊富な教職経験と、禪によって救われた自分の体験をもとにして、若い父母たちと教師のためにと執筆された本である。先生の透徹した教育観が窺われて深い感銘を受ける。予想もつかないような非行が統発している現代にも役立つのではないか。

毎日、坐禅を組み、弓を引か
れていた「徹関先生」と、怠情
に流れる生活を送っている
「哲幹」とでは比すべくもない
が、先生と同じ道徳担当指導
主事を勤めたことのある私
の教育信条に、先生と同じよ
うな考えがあつたことを知
った喜びは大きい。結びとし
て「教育と禪」のはしがきに
ある先生のことを引用する。

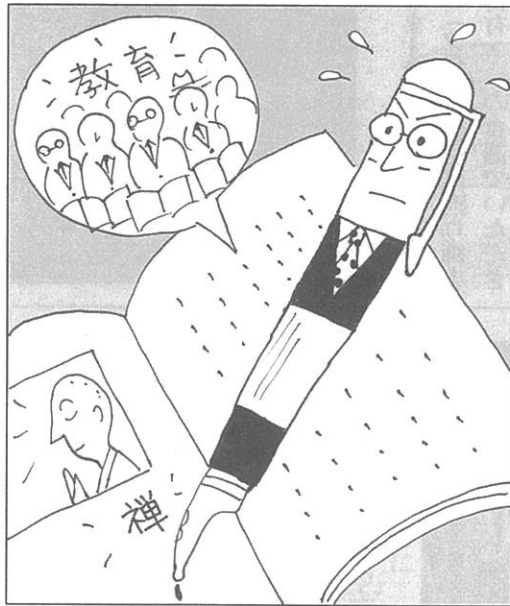
混乱する教育界、救いを求
めている子たちを見るとき、
私を育てて下さった先生方、
老師方の高潔な人格と、比類
ない理念とその教育作為を
想い起こすのである。(中略)
私のバックボーンとなつて
いる禪の教えこそ、現代教育
を救うために欠くべからざ
るものであることを確信す
る次第である。禪とは「人生、
如何に生くべきか」を根本命
題とした生の哲学であり、万
古に通じてあやまりのない
教育方法論を持つものである。
高慢のそしりを受けるこ
とも覚悟の上である。この書
がわが国教育再建の一助と
なることを衷心より冀う次
第である。

〈追記〉

平成十一年五月十五日、私
は四国で開かれた陸経第四
区隊会の帰途、ようやく念願
を達して先生の仏前に詣で
ることができた。
駅前から帝京大学行きの
バスに乗って終点下車。記憶

にあるはずの土塀に囲まれ
た田舎造りの先生の家がな
かなか見つからず、尋ね歩い
て九時半過ぎに着く。二女の
迪子さんが待つておられた。
近所からいただいた葡萄を
頂戴しながらお話を聞く。

けられた勲五等瑞宝章が飾
られていた。
ようど、古い家を建て替え
るとのことで、屋根職人が入
つていた。「父母や祖先の思
い出につながる家を建て直
すのはと思案しましたが」と



座敷は、私がかつて先生の
ご厚意に甘えて泊めて戴い
た頃と変わらない雰囲気であ
つた。臨済宗の質素な仏壇
に、亡き先生の慈顔を偲びな
がら焼香合掌した。その上の
なげしには、高齢者叙勲を受

話される迪子さんであつた
が、私にも思い出になる家の
見納めとなるわけで淋しさ
を禁じ得なかつた。幸せなこ
とに、先生の弓道の道具や資
料は近くに超して来た弓作
り師の方に保存してもらう

ことになったという。
男の子に恵まれなかつた
中西先生だが、迪子さんの長
男が家を継ぐことに同意さ
れ喜んでおられたとのこと
である。

迪子さんは嫁いで大阪に
住んでおられたが、ご主人が
亡くなられた後、児童相談院
として勤められたとのこと
である。長男ご夫妻は、とも

に県の福祉施設に勤務され
ていて、可愛い男の子の赤
やんがおられる。遅出の勤務
に出られるご長男の車で姫
路城の入り口まで送ってい
ただいた。立派なお祖父さん
の遺志を継がれて、福祉と教
育という尊い職業について
おられるご一家に敬意を表
し、ご多幸を祈念しながら、
姫路の町を去った。

平成十一年三月二日 ぼくぼく39号追記

中村元先生を偲んで

昨年のはくぼく四十一号
に、平成十一年七月、思いが
けず自裁された文芸評論家
の江藤淳先生の追悼の記を
載せた。その年の十月、江藤

先生と同じに、筑波の国立教
育会館でお会いした世界的
な仏教学者の中村元先生も
世を去られた。両先生に私淑
して来た私にとって平成十
一年は悲しみの年であった。
中村先生の訃報を伝えた
読売新聞の記事である。

《国際的仏教学者
中村元さん死去》

インド哲学、仏教学、比較思想史
の世界的な権威で、文化勲章受
賞者である東京大学名誉教授の中村
元(なかもら・はじめ)氏が、十日午
前十時四十五分、急性心不全の
ため自宅で死去した。八十六歳だ
つた。(中略)大正元年、松江市生れ。
旧制一高を経て、東京帝大の印度
哲学・梵分学科に進む。ここで仏
教学者の宇井伯寿教授から指導を
受ける一方、倫理学の教授だった
和辻哲郎の知遇も得る。昭和十
九年、「初期ベータータ哲学史」(学
士院恩賜賞)で文学博士の学位を
取得。同年、東京帝大文学部の助教
授となり、戦後の二十九年、教授。三
十九年には文学部長に就任した。
退官した四十八年にはインドの思
想、言語を主なテーマとした公開
講座「東方学院」を東京・神田に開
設。院長として後進の指導に当た
るかたわら、比較思想学会の初代
会長や日印文化協会会長などをつと
めた。執筆活動にも精力的に取り

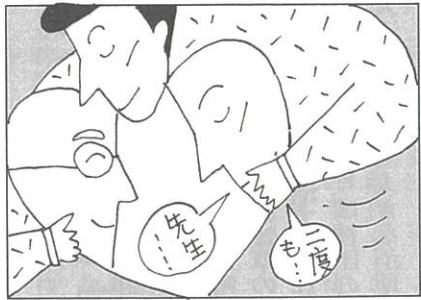
組み、決定版として「中村元選集」(春秋社)全三十二巻、別巻十一の刊行を続けていた。(※この選集は平成十一年七月に完結した)五十二年に文化勲章、五十九年に勲一等瑞宝章を受賞。米ハーバード大やニューヨーク州立大の客員教授として海外で教鞭を執ったほか、インド・サンスクリット学会の「知識の博士」をはじめ、デリー大、サイゴン・バンハン大などの名誉學位を授与されており、国際的な学者として活躍していた。

先生の経歴をみれば、到底、私のような凡人は足元にも寄れない偉大な先生であるのに、不思議な出会いとのか、昭和五十二年十月に筑波の国立教育会館で先生の講演をお聞きし、前夜同宿のご縁をいだいて以来、私は、先生の学識と人柄に惚れ込んで、ずっと敬慕の念を抱いてきた。おこがましいが、私は人生観のバックボーンになる日本人としての物の考え方や、世界的な視野に立つ宗教観、思想感を教えていただいた。

先生への心情は、先生が亡くなられた直後のNHKの追悼番組「巨大な知の遺産」で、若い頃、先生の著書「ブッ

ダのことは：スタタニパーター」に出会って、それを人生のみちびきとして生きてきたという作家の立松和平さんの「私は中村先生の勝手な弟子であつた」と語っている心境と同じである。立松さんは、中村先生の晩年に、一度だけ対談したというが、二度も先生にお会いした私は、もつと強い先生への親密感を持てる幸せを感じた。

◇
今回は、わが尊敬する中村先生との二十年を超える交流の軌跡を辿ることにする。私が始めて守門村の上条小学校の校長になって三年目の昭和四十九年五月に、文部省の校長・教頭中央研修に派遣された。まだ筑波の国



第十四回 KAKA笑の会報告

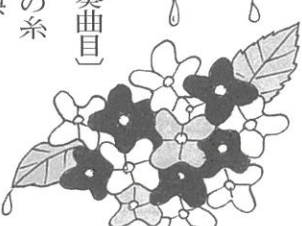
深草アキ・秦琴の世界

五月二十七日(木)夜、本堂に、懐かしくも趣き深い秦琴の調べが響き渡りました。第五回でおいでいただき、再演が熱望されていた「深草アキ氏の演奏です。

今回も尺八・笛の奏者・菊地雅志氏の友情出演を仰ぎ、音響・照明もベストの調整のもと、ノスタルジックで幽玄なお二人のコラボレーションに百名余の皆さんが酔いしれました。

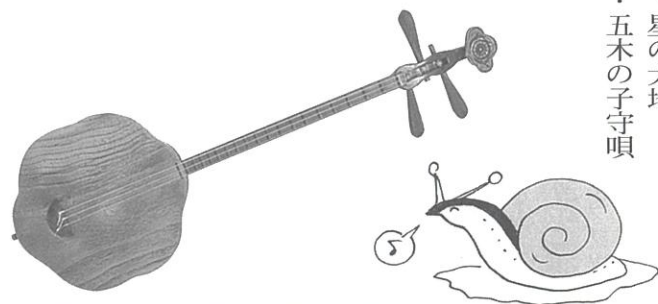


- 〔演奏曲目〕
- ・沙羅の糸
 - ・列即興
 - ・陽関曲 中国古曲
 - ・山百合一輪川に流せば
 - ・月の砂漠
 - ・月氏玄想―セレスの見た夢
 - ・わくらばや大地になんの病ある(高浜虚子)
 - ・絲竹相和(Dマイナー即興)
 - ・星の大地
 - ・五木の子守唄



立教育会館が完成してなく、代々木の青少年オリンピックセンターが研修会場であった。そこは青少年の教育施設ということで、規制もきびしく、休日以外は酒も飲めない。昔の軍隊生活を思わせるが、二十日余り続いた。くじ運の悪い私は、前期の生活班長を引き当ててしまった。生活班長というのは百九十五名の受講者の細々とした日常生活の世話役であり、校

以下、次号へ続く



★深草アキ氏と秦琴
漢代から六朝時代にかけて「琵琶(枇杷)」と呼ばれていた円形の胴体に柱(じゅう)の付いた、直頸の棹を持つ四弦の弦楽器にその源流を求めることが出来る貴重な楽器。深草さんは古民具市で偶然この楽器と出会う。



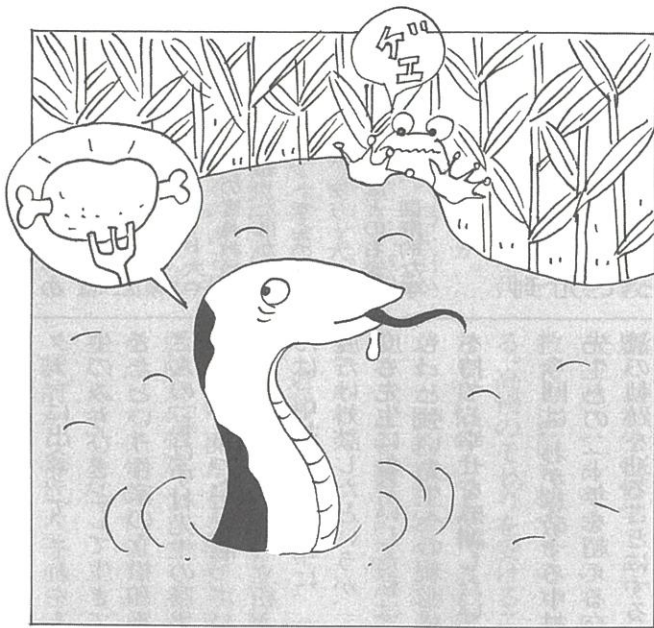
TBSラジオの「筑紫哲也のニュースジョッキー」のテーマ音楽、NHK大河ドラマ「武田信玄」挿入曲、坂東玉三郎の舞台「玉三郎 in 姫路」の音楽監督・演奏。NHKドラマ「蔵」春燈、「權」、関西テレビ・ドラマ「雪の夜の微塵」となりて眠るかな、三橋節子伝説、泉鏡花原作坂東玉三郎公演「海神別荘」等の音楽を担当。国内外を問わず秦琴奏者として著名。

神田町の昔話 『三杯池』

太刀川喜三

初めてお便りいたします。
私は、安善寺様の近所で神田町一丁目に住居しており、町の歴史に興味を持ち、私たちの住んでいる所を調べてみました。ここに綴った話は、まだ安善寺様が神田町に建てられる前から長岡に語り継がれている神田町の昔話です。

その昔、その頃の神田町は昔やかつぽ（水辺の雑草の一種）が群生する沼で、現在の安善寺様の辺りは神田の大沼と云われた大きな沼地でした。ここには長年大きな毒蛇が住んでおり、近くを通る子供達を殺しては生血をすすっていたので、人々は恐れて近づかなくなり



ました。すると毒蛇は、夜中に度々町に出て来て神田町内の人家を襲い家畜等を殺してしまいました。
困り果てた町内の人々は町名主を通して長岡藩に「毎晩怖くて夜もおちおち眠れません。このままなれば町民は皆んな逃げてしまいます。どうぞ毒蛇を退治してください」と願いました。
願いを聞いた藩主は、家中の山本某という武士を呼び出して毒蛇の退治を命じました。命を受けた山本某はハタと困りました。この広い沼地に一人で蛇を追っ

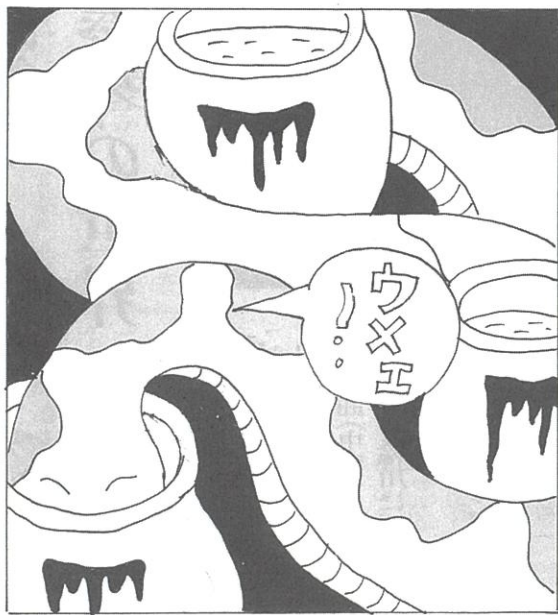


ては到底捕えることは出来ません。それどころか沼にはまって逆に殺されてしまう危険が大きいと…。

とにかく、普通の手段では退治できないと思つた山本は酒で酔いつぶして退治しようと毒蛇が通る道に蓋を開けた酒樽を三個置き、夜になるのを待っていました。するとその夜更けて酒の芳匂に誘われて、腹を空かした毒蛇が現れ、企みの酒とは知らず、まず一つ目の酒樽を飲みほし、さらに二つ目も飲み干して三つ目の酒樽に首を突っ込んだ頃には

酔いが回って動けない程になっていました。

その機を待っていた山本は、すかさず槍を上げて毒蛇に立ち向かい、その頭から胴めがけて滅茶苦茶に槍を突き立てました。数カ所に深傷を受けた毒蛇は、よて来ましたが、ついにここで毒を吐きながら死んでしまいました。それからこの沼側で「サンバイ、サンバイ」と云うと沼の水が急に波打ち、沼の底からブツブツと毒気のある泡が湧いて出たという事です。



三杯池の名はこれから名付けられたものですが、その後、この沼も埋められ、現在では賑やかな神田町の家並みが続いており、安善寺の立派な伽藍もここに建てられています。

お別れ

（平成二十二年三月～六月末）

小林春一様 三月廿一日寂

長岡市寿

竹田政男様 四月二日寂

長岡市新町

根岸カツエ様 四月七日寂

長岡市新町

笠井 稔様 四月十七日寂

柏崎市荒浜

平田 篤様 四月二十日寂

三条市西本願寺

坂田貞雄様 五月二日寂

牛久市さくら台

樋口敬義様 六月三日寂

長岡市

〓冥福をお祈りいたします。

旬歌 愁灯

【二十六話】

ブブゼラの笛

加瀬由紀子

ワールドカップ・サッカーに出場した日本チームの大健闘は久しぶりの明るいニュースだった。試合を盛り上げたブブゼラという独特の笛の音(騒音?)も今はなつかしい。

ときに昨年開催された「トキメキ新潟国体」の「トライアスロン」に出場する、という夢をかなえた私の娘は、二年後のロンドンオリンピックから採用される女子ケイリンを視野に、ケイリンへと矛先を変えた。それもそのはず、国内のどこかで隔週開催されているトライアスロンだが、優勝者には日当分の賞金と地場の産物程度で、ゴルフトーナメントの二十位の賞金レベルにも及ばない。しかも、二百万近いバイク(自転車)、スイムウエア、移動経費、トレーニング費など出費はかさむ一方だ。これでは食っていけない!と本人が

嘆くのも無理はない。(その殆どを払っているのは、実は保護者たる私なのです)が、貧しき母のためにもケイリンの賞金女王を目指す、と豪語している娘ではあるが、はてさて…。

かくいう親の私は彼女が作ってくれたダイエットプログラムを実践、やがて筋肉ウーマンへの道へと、はまりこんでしまった。

思い起こせば二年前、水泳のクロールをもっと早く泳ぎたいと思い立ち、筋トレを始めたのだが、ここで思わぬ展開があった。「あなたには水泳よりパワーリフティングの方が向いている」とスポーツジムのトレーナーに勧められた。「あのウ、パワーリフティングって何ですか?」「…スクワッド、ベンチプレス、デッドリフトがそうです」「はあ?」「ともかくやってみましょうよ」と半ば



おだてられ、半ば開き直ってベンチに仰向けになる。まずはベンチプレスだ。伸ばした手に触れる金属のバーは二十kg。持ち上げようとするとヘナヘナと崩れ去る。続いてスクワッド。立った状態

で背中側、首の付け根の辺りに金属バーを担ぐ。そのまましゃがみこみ、また立ち上がる。一連の動作を指す。こちらも金属バーをひっくりかえりそうになりながら担いだ。「あのウ、金魚売りの格好ですよ」と言っても若いトレーナーには理解できな

いらしい。

最後にデッドリフト。足を肩幅と腰幅の中間ぐらいに開き、床に置いたバーベルを肩幅より少し広く握る。膝を曲げ、背筋を伸ばし、正面を見てスタート。次に、息を吸いながら腰を前方に突き出すようなイメージで上体を起こしていく。挑戦してみるのが、金属のバーを持ち上げるのがやっとだった。

「重くて拳がりませんが」最初かららくに挙げる人は「まずいませよ」と励まされる。とりあえずフォームを作る練習から開始。

さて、「継続は力なり」の格言は事実だった。果たして二年後のこの春のマックスはスクワッド七十五kg、ベンチプレス六十、五kg(ベンチシャツ着用七十二、五kg)、デッドリフト七十五kgを挙げられるようになった。

そして勧められるまま、新潟県ベンチプレス大会に出場することになった。

大会一週間前の体重測定五十八kg。六十kgまでのクラスに出場するので審査通過なのだが、いざベンチで

プレスすると拳がらない。トレーナーから「あと一、九kg太らなないと不利だな」と言われる。

三日前の検量。「今六十一、五kgです、失格ですよね?」トレーナーの電話の声は不機嫌で、「今から大会当日まで完全に絶食してください!」「あのウ、プールで二千メートル泳げば一、五kg減りますが」「筋肉が消耗するので運動はダメ」「土曜日は同窓会があって宴会なのですが」「飲物は全てコップに戻せ。食べ物も絶対食べるな。口の中にツバが溜まったら吐き出せ。部屋、車内、暖房を強にして厚着をしてガンガン汗をかけ。サウナと風呂はオーケー」という厳しい宣告が。

人生始まって以来の絶食体験の末、大会当日の計量五十九、九kgでセーフ。ブブゼラの音もなく淡々と競技は続けられていった。私は二回目に六十五kgを挙げて金メダルと賞状授与。絶食の苦しさに勝るスポーツの楽しさを教えてくれた娘に感謝したい。

ボブの独り言

この次はどんな光景に 出会えるか楽しみです

ボブの独り言

鬱陶しい日々が続く季節になってきました。お寺の境内は次々と季節の移ろいを感じる花々が咲いては終わっていきま。今は十種類近くの紫陽花が咲き、一重・八重・斑入りのドクダミが勢い良く咲き乱れ、モンタナが柿の木に絡まって沢山の可愛い花を咲かせています。

そんな繁みの中から私が時折カナヘビを銜えて家の中に持って入り遊んでいるものから、お母さんも久美子さんも悲鳴をあげてしまします。時々、とても綺麗な色をしたカナヘビを見つけた事もあるのです。五月の中頃でしたでしょうか？ 夕方ドスンという音と共に樗の木に作った巣からまだ独り立ちできないカラスの子が落ちてきました。その子は飛べないので、



ヨチヨチと庭の中を縦横無尽に歩き回るものですから、私も犬達も特に私に対する攻撃が凄まじいのです。庭に入ると大変。木の上から見張っている親カラスが低空飛行で襲いかかってくるので、怖くて庭にも出れない日が数日続きました。

こんな状態が何時まで続くのだろうと思っていた矢先の、やはり夕方、どうしたのか巢のある樗の木の下で死んでいました。「明日、穴を掘って埋めてあげよう」と言いながら翌朝見ると羽一つ残さず、跡形もなくなっているではありませんか。どうしたのでしょうか？ 親が始末したのでしょうか？ 疑

いの目は私のほうにも向けられたようでしたが、そんな恐ろしいことは私には出来るわけがありません。

それから数日後、皇居のカルガモよろしく親カラスの後を一列に並んで三羽の子カラスが駐車場を歩いている姿は、電線に一列に並んでいる不気味なカラスとは違い、何とも微笑ましい光景がありました。

何時もはカラスを見ると敵対心を剥き出しにする私ですが、邪魔してはいけないと、草かげからそつと眺めていました。街中なのにまだまだ自然がたくさん残っている所、この次はどんな光景に出会えるのか、ワクワクして今日も家の周りを歩き回っているのです。ニヤーン！

編集 雑感

今年四月八日、私の高校時代から大切な友人が肺がんで亡くなり、ショックを受けています。

事の始まりは、昨年の八月初めに私の所に来て、家の事、子供達の事、その他もろもろいろいろと話し始めた。めったにこんな事を言う人ではなかったので冗談で「お前がなんか何かになったのか？」と聞くと、本人の返答は「肺がんで手術がならないうほど進んでいて、リンパを通じて脳に転移したので、いま放射線治療をしてきたところだ」、あと何年と言われたのかと聞くと「うまく行ったら三年と言われた」。こんな時、何を言えば良いのか、何も考えないで口から出た言葉が「じゃ五年は大丈夫だ

な、お前はいいよ先がわかるから。俺は事故やその他でいつ死ぬかわからないからな」。なんてこんな馬鹿な話をしたのか、今でも後悔している。その二日後、本人も飲みたいと言うことで二人で酒を飲みに行った。すごく元気が良かったが、どうしても今後の事が話題になり、少しでも頑張つて長生きをしようとして二人を取り合つて何回も泣いてしまいました。こんな時、どうしたら本当に相手に対して心配りが出来るのか、本人はどう思っていたのか、返事を聞かないうちに本人は…。

本人との最後の日は、亡くなる二日前。急に入院したという知らせを受け、顔を見に行つた。あまり調子良くなかつたようだ、色々転移したようだった。いつもは軽い口喧嘩ばかりしていたのだが、その日に限り一緒にコーヒを飲み、話の中で「コバ、もう皆に（病気の事）知られてもいいや」。これが最後の言葉。四月七日生まれの早すぎる五十九歳。冥福を祈る。合掌

お便り原稿用紙

季刊誌では、壇信徒・読者の皆さまと、ごいっしょに誌面をつくりながら、コミュニケーションを深めたいと思います。ハガキまたはお手紙、ファックスなどで、お気軽にお便りをお寄せください。お待ちしております。

原稿の例

- 思い出話／ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
- 私に言わせて／家事や子育てのお話、身近な出来事など。
- 教えてください／仏事のしきたりや疑問（編集部や住職がお答えします）など。
- 嬉しい・楽しい嬉しかったこと、悲しかったこと、怒ったこと。

第五十一号、秋号は平成二十二年九月十日（金）発刊予定です

小林善秋